

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第十八回）

こ せ や ま
「巨 勢 山」

こせやま

つばき

1) 巨勢山の つらつら椿 つらつ

み

しの

こせ

はるの

らに 見つつ偲はな 巨勢の春野を

作者・坂門人足 さかとのひとたり 巻第一―五十四

（解説）巨勢山の連なる椿の木をつくづくと見ながら偲ぼ
うよ。椿の花咲く巨勢の春の野の有様を。

①「つらつら椿」は原文では「列々椿」とあり、椿を、花
の連なり咲く習性によってとらえた語らしいとの説が
ある。

②「巨勢」は JR和歌山線と近鉄吉野線との交差する「吉
野口駅（奈良県御所市古瀬）ごせしこせ」のあるところであり西側に
そびえる山が「巨勢山」といわれる。

③巨勢（現・古瀬）は奈良県北西部の大和盆地が尽きる地
で狭い溪谷を南北に重阪川へえさかが流れる。当時、この溪谷は

飛鳥や奈良から紀伊（現・和歌山県全域及び三重県の一部）への旅はかならず、この巨勢路と呼ばれる谷沿いの道を通らなければならなかった。

④題詞によればこの歌が、大宝元年（七〇一）秋の九月（太陽暦十月）、文武（第四十代）天皇と祖母持統太上天皇とつれだって紀の牟婁の湯（現・「白浜温泉」）むろ Ⅱ和歌山

県牟婁郡白浜町）さかとのひとたり に行幸時に随員坂門人足がこの地で、この歌を作った時は晩秋のことであるから椿の木に花はなく眼前に居並ぶ木に群がり咲く春野の椿を想像して詠んだのであろうとの説がある。

⑤また、この歌（巻一―五十四）にかかわるのでは、といわれる次の歌ある。

2) 川の上の うへ つらつら椿 つばき つらつ

らに 見れども飽かず あ 巨勢の こせ

はるの

春野は

(解説) 川のほとりに咲くつらつら椿よ、見ても見ても飽きはしない。巨勢の春野は。

・なお、この歌は実際に花を見て作った歌で、前の歌(五十四)より古く作られた原歌と見る説もある。

(参考文献) 新潮日本古典集成「万葉集」、伊藤博著「万葉集釋注」等

(写生地)

JR和歌山線と近鉄吉野線が交差する「吉野口駅」の東側の小高い丘にある御所市桶野から前面、西側奥に連なる椿の名所・巨勢山とその麓に巨勢路が通る谷沿いの街、当時の巨勢といわれている奈良県御所市古瀬を描く。

(池田杏花)

